

アン・ブラッドストリート

— To my Dear Children を中心に —

木村 淳子

1650年にロンドンで *The Tenth Muse Lately Sprung Up in America* というタイトルの詩集が発行された。著者はアン・ブラッドストリート (Anne Bradstreet) イギリス生れの植民地人であり、且つ英語で詩を書いた最初の女性であった。『最近アメリカに出現した第十番目の詩神』というタイトルに驚いたのは、他ならぬ著者自身ではなかったろうか。1678年には著者自身の手が加えられた *Several Poems Compiled with great variety of Wit and Learning, full of Delight* と改題された改訂版がボストンで出版されている。しかし何よりも、“The Prologue” と題された序詩の中に私たちはアン・ブラッドストリートのつつましやかな、だが確固とした自己主張を読み取るのである。各連6行、8連から成るこの詩でアン・ブラッドストリートが言っているのは、おおよそ次のようなことである。「戦争や王侯達の事蹟、或は歴史的なことがらは、私の拙い筆の及ばないところである。私はバルタスのような才能ある詩人をうらやましく思うが、もともと才能に恵まれていない者にはどうにもならないことだ。お前の手には針仕事の方がふさわしいと人々は言う。それでも一生懸命になって私は詩を書く。そして偶々秀れた詩が書けると、人は盗作ではあるまいかなどと言う。私は女のほうが男よりも勝っているとは思わないが、女にも秀れた点があることは認めてもらいたい。月桂樹の冠が欲しいなどとは思わぬが、せめてタイムかパセリの花環を与えてくれるなら、それによって輝

2 アン・ブラッドストリート

きを増すのは、男性の皆さん、あなたたちなのです。」

己の置かれた状況を嘆きながら、しかし、ブラッドストリートはしっかりその状況を把握している。詩神たる栄誉を女神に与えた古代ギリシャ人のほうが女性理解の点において勝っていたのではなからうか、と考えながらも、“Men can do best, and women know it well / Pre-eminence in all and each is yours; / Yet grant some small acknowledgement of ours.”（綴りは原文のまま。以下英文の引用の綴りは原文のまま）「(物事を) いちばん良くできるのは男性です。女性はそのことを充分に知っています。男性こそすべてにおいて勝っていますが、私たち女性のことも認めてもらいたいのです。」そして、“If e're you daigne these lowly lines your eyes / Give Thyme or Parsley wreath, I ask no bays, / This mean and unrefined ure of mine / Will make you glistring gold, but more to shine.”

「もしもこの拙い詩行にお目を留めて下さいますなら、月桂樹の冠ではなくて、タイムかパセリの花環を下さい。この卑しい洗練されていない鉱石はあなたを輝く黄金とし、それをさらにもっと輝かせることでしょう。」と言っているのだが、このつつましやかな言葉の底に潜む強烈な自我意識に、私は驚かされたのであった。

17世紀のニュー・イングランド植民地の状況がどのようなものであったかについては、歴史書を繙けばあきらかであろう。恐らくその地は、文明を遠く離れた荒野の開拓という大事業にかたて加えて、宗教的・政治的・経済的な問題の山積する極めて人間臭い争いの舞台でもあった。問題解決のために家を外にすることの多い男達にかわって、大家族を支えなければならぬ主婦達には、家事以外に割くことのできる時間はなかったであろうし、また家族のためにすべてを捧げるのが、立派な主婦としての本分であったのだろう。「お前の手には針仕事の方がふさわしい」という世間の人の批難は、あながち批難のための批難ではなかつ

た。当時のピューリタン達が詩に対して抱いていた考え方を示すものとして、1726年にコトン・マザー (Cotton Mather) が若い聖職志望者達に与えた言葉がよく引用される。⁽¹⁾ すなわち、「諸君に是非忠告しなければならぬ。喉の渴きを抑えなさい。あまり詩に心を向けて、熱烈な詩的な書物ばかり、いつも読みふけるこのないように。…詩の女神は売女となんら変わる場所がないのだから。」これがマザーの言葉である。と聞くと、私たちは何故か、誤解をしてしまいがちであるが、これを厳格なピューリタンの教條から発した言葉とばかり解釈してはいけないのではないだろうか。現にマザーの聖職志望者に与える言葉の前段には、「諸君に詩について多少の心得を持つことをおすすめする。」という一文があり、さらに「エピグラム位は作ってみることをおすすめする。」と言っている。コトン・マザーは、詩の心得が実用に役立つ限りにおいて、否定はしないのである。1726年という年は、アン・ブラッドストリートが亡くなって50年余りを経過した年ではあったが、植民地の中での考え方は、さほど大きな変化を遂げてはいなかったであろう。事実、植民地に於て最初に印刷された本が、韻文による聖書の翻訳である、*Bay Psalm Book* であったのである。ピューリタンのすべてが、詩歌を解さぬ不粋な人たちであったのではなく、最優先を求められる日常の事どもに時間を奪われて、余裕の中から生れる文学には手がまわらなかったというのも、一つの真実であるように思われる。⁽²⁾ そして、こう考えてみると、アン・ブラッドストリートという一人の女性の存在が、とても貴重なものに思えてくる。彼女の発した控え目な自己主張は、やがて2世紀を経た頃に、もっと強い声となって響き出すことになる。とは言っても、それはまだ予感でしかないのだが。

メイフラワー号に遅れること10年、1630年に、ジョン・ウインスロップ (John Winthrop) に率いられたピューリタンの一行がマサチュー

4 アン・ブラッドストリート

セッツに入植した。その中に18才の花嫁アン・ブラッドストリートが加わっていた。父トマス・ダッドレイ (Thomas Dudley) は第二代の植民地総督であり、夫のサイモン・ブラッドストリート (Simon Bradstreet) も彼女の死後総督になった人である。植民地の指導者の妻として彼女自身の日常も多忙を極めたに違いない。しかも彼女は8人の子供達の母であった。私の興味は彼女がどんな女性であったのか、何が彼女に詩を書かせたのかに集中する。そこでいましばらく、彼女の生涯を、彼女自身が子供達に残した手紙の中から拾ってみたいと思う。

アン・ブラッドストリートは1612年頃にイギリスのノーサンプトンで生まれたと言われる。父トマスは有能な軍人で実務家として知られた人であった。ダッドレイ家については様ざまのことが言われているが、はっきりとしたことは知られていない。ともあれ、父トマスは1619年にその実務の才を見こまれて、リンカン伯の執事となり、若くして家督と共に父の遺した借財を継いだリンカン伯を助けて、伯爵家を再興した功勞者であった。幼年・少女期のアンは、伯爵の邸内で当時の女性としては一流の教育を受けた。伯爵の庭はまさに、少女の生き生きと育ちゆく知的な慾求を満足させる知の庭であった。私は少女期のアンの姿を、城内を散策するオフフェアに重ねてしまいたくなる。そして伯爵の庭園をアンドルー・マーヴェルの描く庭園の様子になぞらえてしまいたくなる。「子供達への手紙」“To my Dear Children”の中で彼女は昔を振り返って次のように述べている。

In my young years, about 6 or 7 as I take it, I began to make conscience of my ways, and what I knew was sinful, as lying, disobedience to Parents, &c. I avoided it. If at any time I was overtaken with the like evils, it was a great Trouble. I could not be at rest till by prayer I had confest

it unto God. I was also troubled at the neglect of Private Dutyes, tho: too often tardy that way. I also found much comfort in reading the Scriptures, especially those places I thought most concerned my Condition, and as I grew to have more understanding, so the more solace I took in them.

およそ6才か7才の頃だったと思いますが、私は自分の行いや、嘘をつくこととか両親に従わないことなど、罪深いと私が考えることどもを意識するようになりました。私はそれを避けましたが、時にこのような罪にとりつかれると、それは大きな悩みとなりました。お祈りをして神様に告白してしまわぬうちは、心の平安を取り戻すことができませんでした。私は自分の務めを怠ったことでも悩みました。その点では私はいつもぐずでした。私は聖書を読むことで大きな慰めを得ました。特に私の状況に大いに拘りのあると思われる箇所⁽¹⁾に慰めを見出しましたが、もっと大きくなって理解力が増してくるとより大きな慰めを得るようになりました。

イギリスの全歴史を通じて、比類のない程宗教的な世紀といわれる17世紀に生きた人間として、この敬虔さはごく自然な態度であったと言えるかも知れないし、また信仰心に篤く愛情深い母ドロシー・ヨーク・ダッドレイ (Dorothy York Dudley) の薫陶の賜物であったかも知れない。

やがて彼女の読書の範囲は広がっていった。フランスの宗教詩人デュバルタス (Du Bartas)⁽³⁾ の宗教詩、フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney)⁽⁴⁾、シェイクスピア (Shakespeare)⁽⁵⁾ の作品、ウォルター・ローリー (Sir Walter Raleigh) の『世界の歴史』等々である。読書範囲の広がりと同時に、興味の範囲も広がったであろう。

But as I grew up to be about 14 or 15 I found my heart

more carnall, and sitting loose from God, vanity and the follies of youth take hold of me.

しかし、14,5才にもなると、私の心は世俗に傾き、神から離れ、虚栄と青春の愚行が私を虜にしました。

活潑な知的な若い精神が、神様以外のものに心を動かされるのも、極めて自然ななり行きであったかも知れないが、ブラッドストリート自身は、このような愚行や思い上りに対して、神様は罰を下されたのだと考える。

About 16, the Lord layd his hand fore upon me and smott mee with the small pox. When I was in my affliction, I besought the Lord, and confessed my Pride and Vanity and he was entreated of me, and again restored me.

16才の頃、主はその御手を挙げて、天然痘で私を笞打たれました。苦しみのうちに私は主を探し求め、己の高慢と虚栄を告白しました。主は私の願いを聞き入れて下さり、再び私を救って下さいました。

後年彼女は自らを旅路に疲れた巡礼 (weary pilgrim) と称したが、神を求めながらも逡巡し、悔悛しつつ神を尋ねる巡礼の旅は、この頃からすでに始まっていたように思える。

After a short time I changed my condition and was married, and came into this Country, where I found a new world and new manners, at which my heart rose. But after I was convinced it was the way of God, I submitted to it and joined to the church at Boston.

しばらくして私は境遇を変えて結婚しました。そしてこの国にやってきましたが、ここはすべてが私にとっては新しい土地で、私の心はそ

これに対して反撥を覚えました。しかしそれが神様の思召しだと考えた時に、私はそれに従おうと思いました。そうして、ボストンの教会に加わりました。

16才の年にアンは25才の青年サイモン・ブラッドストリート (Simon Bradstreet) と結婚した。彼はリンカン伯に仕え、父トマスの下で働いていた。父トマス同様サイモンも宗教的には非国教徒であった。

そして、トマス・ダッドレイはリンカン伯の執事として、その忠誠と勤勉を高く評価されて、リンカン伯の片腕的存在となっていたが、1628年頃に一時お邸を退いて、リンカンシャーのボストンに居を移したことがあった。この時に知り合い、生涯親交を結んだのが、後々植民地の霊的指導者となるジョン・コトン牧師 (Rev. John Cotton) であった。

1627年頃からダッドレイは新世界に福音を伝えたい、という願望を抱いていたが、1629年10月に移民団の中に名を連ねることにより、彼の望みは実現へと踏み出すことになった。この時一行のリーダーとして選ばれたのがウィンスロップであり、ダッドレイとサイモン・ブラッドストリートはアシスタントに選ばれたのであった。翌年3月29日、彼等はアーベラ号に乗船して、新大陸へ向ったのであった。

「新しい国はすべてが新しく、私の心はそれに対して反撥を覚えた」⁽⁶⁾とアン・ブラッドストリートは子供達に、入植当時の心情をうち明けているが、ルネッサンスを経たイギリスの知的な庭から移し植えられた彼女のいつわらぬ心境であったろう。「丘の上の町」の建設を目指したピューリタン達にとって、未開の荒野は扱うに手ごわい相手であったろうし、このグループのすべての人間が、共通の目的意識に心を一致させていたのでもない。意見の対立、抗争が日常的な出来事であったであろうことは、ウィンロップスのジャーナルをはじめとして当時の記録に詳らかで

ある。そのような社会の指導者の娘・妻として、アン・ブラッドストリートがどのような辛酸をなめたかは明らかではないが、それでも彼女の作品の中から推測することは困難なことではない。さらに彼女自身の病弱と、結婚後の数年間は子宝に恵まれないことが大きな悩みの種であった。

It pleased God to keep me a long time without a child,
which was a great grief to me, and cost me many prayers
and tears before I obtained one,

永い間神様は私に子供を授けて下さりませんでした。それは私にとって
は大きな哀しみで、私は涙を流して何度も祈ったものでした。

それでも、夫サイモンとの生活は彼女には大きな喜びと俸せをもたら
してくれるものであった。言わばラヴソングとも言うべき詩が夫のため
にうたわれている。その中から次を挙げてみよう。

To my Dear and Loving Husband

If ever two were one, then surely we.
If ever man were lov'd by wife, then thee;
If ever wife was happy in a man,
Compare with me ye women if you can.
I prize thy love more than whole Mines of gold,
Or all the riches that the East doth hold.
My love is such that Rivers cannot quench,
Nor ought but love from thee, give recompence.
Thy love is such I can no way repay,
Then while we live, in love lets so persever,

That when we live no more, we may live ever.

ふたりで一体となっているもの、それは私たちです。

妻に愛されている夫、それはあなたです。

夫のうちに幸せを見出す妻がいるとしたら、女性の皆さん、私と比べてみてください。

金山の黄金よりも、あなたの愛のほうがはるかに尊い。

東洋の財宝よりも、はるかに尊い。

私の愛の熱はとても強いので、川もその熱を冷ますことはできない、私の愛にかなうのは、あなたの愛だけ。

あなたの愛はとても大きいので、私はそれに報いることができません。神様が幾重にも報いて下さることを祈るだけ。

この世にある間は愛し合って過しまししょう、

この世を去る時が来たら、永遠に生きるように。

この詩はブラッドストリートの死後に発見された詩稿の中に含まれていたものである。私とあなたの愛はこの世の金銀財宝も購うことのできぬ程貴重なもの、そしてそれは限りあるこの世の時間を超えて、永遠に続くものという、大らかな誇らしげな詩である。ピューリタン達は結婚を神の嘉し給うものと考えていた。彼等にとっては、愛し合ったが故に結婚に至るのではなく、神によって結ばれて夫婦になったが故に愛し合うのである。この詩にはピューリタンの結婚観が盛られている。そしてまた、思い出されるのは、ジョン・ダン (John Donne) の *Songs and Sonnets* の中の佳篇 “The good-morrow” である。ダンの材智縦横のコンシートは見られないが、その素朴さがかえって心を惹く。愛する夫は、しかし、多忙を極める人でもあった。イギリス政府との交渉のために渡英して、長期間家を留守にすることも多かった。夫の不在の時間を埋めるために、物を書くことは格好の手段であったろうし、巡礼の旅

の記録をするために物を書くことは、彼女にとって必要不可欠であった。やがて彼女が8人の子供に恵まれてからも、書くことは彼女の生活の一部となって、生涯にわたって、発表の意志などなしに、彼女は書き続けたのであった。書くことは祈りであった。

I have had great experience of God's hearing my Prayers, and returning comfortable Answers to me, either in granting the Thing I prayed for, or else in satisfying my mind without it; and I have been confident it hath been from him, because I have found my heart through his goodnes enlarged in Thankfullnes to him.

私は、神様が私の祈りを聞き入れて下さり、答えて下さったという、すばらしい体験をしたことがありました。私が祈り求めたものをお恵み下さる場合と、形あるものはなくとも心の満足が得られる場合とがありました。私は神様が与えて下さったものと確信いたしました。なぜなら、神様の善にふれて、感謝の念で私の心が大きく広がったのを知ったからでした。

しかしこの至福は永続しなかつた。疑いや不安が心を領することがしばしばだった。時にはサタンにそそのかされて、聖書の信憑性に疑いを抱くこともあった。それらを祈りによって解決して行ったのであるが、当時の植民地の社会的な状況から彼女が胸に抱くようになったのは、次のような思いであった。

When I have gott over this Block, then have I another putt in my way, That admitt this bee the true God whom we worship, and that bee his word, yet why may not the Popish Religion be the right? They have the same God, the same

Christ, the same word: they only enterprett it one way, wee another.

この躓きの石が取り除かれると、また別のが私の道の上に置かれました。つまり、これは私たちの礼拝する真の神であり、神からの言葉である、それなら、カトリック教も正しくないはずはないのではないか。彼らも同じ神、同じキリストを礼拝し、同じ神の御言葉を信じているのではないか。彼らは彼らのやり方でその言葉を解し、私たちには私たちの解釈がある、と思うのでした。

この率直な言葉が、もしも実際に言われたのであったなら、当時の植民地社会にどのように大きな波瀾を捲き起こしたことだろう。ロジャー・ウィリアムズ (Roger Williams) やアン・ハッチンソン (Anne Hutchinson) と同様の運命を彼女もたどることになっただろうか。アン・ブラッドストリートのような立場の人間には、これは口には出してはならない言葉であったし、口に出しもしなかった。その代り、このような心情は初期の四元数詩の中にカモフラージュされた形でうたわれている。四元数詩 (Quaternions) というのは、『四元素』 (The Four Elements), 『四気質』 (The Four Humours), 『人間の四つの年令』 (The Four Ages of Men), 『四季』 (The Four Seasons) であり、それに未完の『四王国』 (The Four Monarchies) が加わる。これら初期の長詩には彼女の教養と知的興味の対象をうかがわせるものがある。しかしこれらが純粹に詩を書こうとする欲求だけから書かれたのではないことは、確かのようなのである。J. K. ピアシー (J. K. Piercy)⁽⁷⁾ によれば、ブラッドストリートにとって詩を書くことは、新世界に対するやり場のない反抗心のはけ口であった。また G. C. ナイト (G. C. Knight)⁽⁸⁾ によれば、その詩行にはイギリスに対する望郷の念がそちこちに見出される、という。もし詩を書くことがなかったならば、「21才で気が狂っ

てしまう」⁽⁹⁾ような植民地の暮しであった。

But some new Troubles I have had since the world has been filled with Blasphemy, and Sectaries, and some who have been accounted sincere Christians have been carried away with them, that sometimes I have said, Is there ffaith upon the earth? and I have not known what to think.

この世に神に対する不敬や、党派への偏りが起り、これまで誠実なキリスト教徒と考えられて来た人たちが追われた時に、新しい悩みが私のうちに湧き上がりました。この地上に信仰はあるのだろうかとは時々考えました。私にはどのように考えていいのかわかりませんでした。

この世に神に対する不敬や、党派への偏りが起り、これまで誠実なキリスト教徒と考えられて来た人たちが追われた時に、新しい悩みが私のうちに湧き上がりました。

聖書の意に添って神の国を建設しようとする植民地は、その目的そのものから発生する矛盾を数多く抱えていた。それらの矛盾をつく者達は異端として弾圧されたり追放されたりした。アン・ハッチンソンやロジャー・ウィリアムズ、クェーカー教徒達は、植民地の建て前に添わなかったために、追放、弾圧されたのだが、彼らが正しいキリスト教徒ではないという確かな証拠はなかった。植民地政治の表街道から退いた裏通りから眺めたときに、ブラッドストリートが、「この地上に信仰はあるのか」どうかわからなくなったと思ったのは、よく理解できるように思われるし、又当時の女性の視点というものを明らかにしてくれているようにも思う。それはまた、「他の人たちが、ぐらぐらと安らかに眠っている夜半、私の敏い眼だけが覚めて」⁽¹⁰⁾いて、物思いにふけり、思索する女性の姿を浮び上らせる。コトン・マザーが「今、ぐらついているこの国には詩がうようよする程あるが、その詩を読むことに限りない食慾を感じないようにしなさい」と心配したのは、こうした目覚めた知性が、建設途上の国の屋台骨を揺るがすことがないようにということだったの

だろう。或る意味では、アン・ブラッドストリートの詩は、このような
 コトン・マザーの心配を見事に具現していると言ってよいのかも知れな
 い。彼女は常に迷い、疑い、嘆きながら旅路を行く求道者、巡礼であっ
 たからである。迷い、疑いながら求めたものは、しかし、ただひとりの
 神であった。彼女の詩の中から任意のひとつを選んでみる。そこに読み
 とれるのは、内的な苦悩と神への希求である。

When Sorrows had begyrt me round,⁽¹¹⁾
 And Paines within and out,
 When in my flesh no part was sound,
 Then didst thou rid me out.

悲しみが私をとり巻き、
 うちにも外にも苦痛のあるとき、
 私の肉体のどの部分とて健康ではないとき、
 その時あなたは私を追い払われたのです

或は、

In my distresse I sought the Lord,⁽¹²⁾
 When nought on Earth could comfort give;
 And when my Soul these abhor'd,
 Then, Lord, thou said'st unto me, Live.

哀しみのうちに私は主を探し求めた、
 この世に何の慰めも見つからなかった時。
 私の魂が、もう嫌だと言ったとき、
 主よ、あなたは仰言いました、生きよ、と。

或は、

O stay my heart on thee, my God,⁽¹³⁾

Uphold my fainting Soul!
And, when I know not what to do,
I'll on thy mercyes roll.

おゝ神よ、私の心をあなたの上に留めて下さい！

私の消え入る魂を支えて下さい、

どうしてよいのかわからぬ時、

私はあなたのお慈悲にすぎります。

アン・ブラッドストリートの詩は、まず何よりも祈りと瞑想の詩である。地味豊かなイギリスの庭園から荒野に移し植えられた一茎の花が、その根を張ろうとする努力の軌跡である。植民地での生活が長くなるにつれて、詩の言葉はより簡素になり、率直になってくる。祈りに虚飾は必要ないからかも知れぬが、私にはそこに植民地の生活の厳しさが見出せるような気もする。言葉遊びをするだけの余裕はなかったかも知れない。絶えず死に直面しながら、しかも生きる道、自己確認の道を模索していたのだから。

時にアン・ブラッドストリートを、その自然観照の姿勢から、ワーズワースをはじめとする浪漫派詩人の先駆と見なす考え方もあったが、本質的には17世紀の宗教的な雰囲気の中に育った詩人と考えるのが妥当であろう。もしも彼女の中に浪漫派と通底するものがあるとするれば、その浪漫派はやはりアメリカの19世紀の浪漫派であろう。確かな自己を持って、自己の魂の求めるところを探索しようとしたところに、エミリー・ディキンソン等につながるものの予感がある。しかしその自己を明確に主張することができるようになるには、その後2世紀を経て、この国の屋台骨がしっかりと据えられるのを待たねばならなかった。

<註> テキストについて、この稿を草するに当って、次の2冊をテキストとして用いた。

Works of Anne Bradstreet: Edited by Ellis, Peter Smith, 1962.

The Works of Anne Bradstreet: Edited by Jeannie Hensley, A John Harvard Library Book, 1967.

- (1) cf 『講座アメリカの文化 I : ピューリタニズムとアメリカ』, 大下尚一編, 南雲堂。
- (2) 「詩を作るということは, 詩人による creation であり, そこから無意識的に自らを恃む姿勢ができ上がってくる。このことをコトン・マザーは恐れていたのではないか」という考え方が Roy Harvey Pearce 教授によって提起されている。c. f. 『講座アメリカの文化 I : ピューリタンの文学』。
- (3) Du Bartas (1544—90) の『聖なる週』が Sylvester の訳によって紹介されて, 当時よく読まれていた。ブラッドストリートもこの詩の愛読者であった。1641年には “In Honour of Du Bartas” という詩を作っている。
- (4) Sir Philip Sidney もブラッドストリートの敬愛する詩人で, “An Elegie upon that Honourable and renowned Knight of Sir Philip Sidney” という詩をブラッドストリートは書いている。
- (5) Shakespeare に関しては, 演劇を禁じた清教徒として, ブラッドストリートが読んだかどうかは詳らかではないが, 明らかに Shakespeare の影響と見なされる部分が, 彼女の詩の中に認められる。cf. *Anne Bradstreet*, by J. K. Piercy.
- (6) cf. *To my Dear Children*.
- (7) *Anne Bradstreet*, by Josephine K. Piercy, Twayne's United States Authors Series.
- (8) *American Literature and Culture*, by Grant C. Knight, New York, 1932, p. 43 “A pardonable homesickness for England shows now and then through the verses she wrote as a solace for her duties.”
- (9) cf. *Anne Bradstreet*, p. 33.
- (10) from *Religious Experiences and Occasional Pieces*, by Anne Bradstreet
 “By night when others soundly slept,
 And had at once both ease and Rest,
 My waking eyes were open kept,”
- (11) *ibid.*, “For Deliverance from a Feaver”
- (12) *ibid.*, “ffrom another sore ffitt”
- (13) *ibid.*, “In my Solitary hours in my dear husband his Absence.”